
ラブレター零・ZA・音編

零・ZA・音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラブレター零・ZA・音編

【Nコード】

N5182A

【作者名】

零・ZA・音

【あらすじ】

今日こそは！と、意気込んでラブレターを出した俊哉。しかし、どこでどう間違ったのか…そのラブレターをもっているのは、俺の苦手な女の子…静香。はてさてどうなるのか！俊哉の恋の行方は！？

（前書き）

同じ設定で書こうという第一弾のお話です。「グループ小説」で共同制作の方の小説が読めますので是非、読んでみてください。

俺は一人、教室に残り、考えていた。どうしてこうなったか…。
なんであの時、言えなかったのか…。それが今でも俺の頭の中を巡
っていた…。

「何してるの？…帰るよ。俊哉」

俺を呼ぶ声で我に返る。見れば、ちよつとご立腹な様子の静香が立
っていた。

「ああ…今行くよ」

「遅いよ…まったくろいんだから」

「お前がせつかちなだけだ」

「私は、普通でえゝす」

舌を思いっきり出して、可愛くおどけてみせる静香。付き合い始め
たばかりの俺の彼女だ。

ただし、俺が好きな人…ではない。

間違えてラブレターが渡ってしまった相手である…。

* * * *

毎日、今日こそは！と…決めていたが、いざ行動に移すと緊張する
ものだ。

俺の手の中には、思いを籠めたラブレターがある。今日こそは、これを渡して告白するんだ。

「よしっ！…行くか」

俺は気合を入れて目的の場所に向かって行っただけ。

「えっと…確かここだよな」

目的の場所 それは下駄箱。オーソドックスに俺は、ラブレターをここに入れる事にした。

朝一番、まだ誰もいないこの時間を狙ってきたのだ。…失敗する訳にはいかない。

念入りに確認して、俺は下駄箱を開けてラブレターを入れた。

「どうか…思いが伝わりますように…」

下駄箱を拜んで俺はその場を後にした。後は野となれ…山となれ…。神様に任せて教室を目指した。

まだ誰もいない教室は静かで何だか寂しい気がした。誰か早くこないかなと思っていたら、扉の開く音がした。

「あれ？…今日は早いんだね。俊哉君」

「ふえ…あつ、お、おお、おはよう！沙紀さん」

「ふふふっ…どうしたの？何か今日は変だよ」

口元を押さえて笑っている沙紀さん。とても優雅で可憐だ…。

優しく微笑む顔はまるで天使のようで…俺の全てを射抜いていく力を持っていた。

「今日は日直だから、私が一番だと思ったのに…まさか先に來てる人がいるとは思わなかったよ」

「えっ…ああ、そうなんだ」

俺は、平静を装いつつ…内心かなりびびっていた。もし、もう少し遅かったら鉢合わせていた事になる。

なんで、日直の事に気づかなかったんだ…俺は！

「そういえば…今日は静香は一緒じゃないの？」

「あいつは多分、まだ寝てるんじゃないかな」

「そっか、まだ早いものね…でも、起きれるのかな？」

時計を見ながら聞いてくる沙紀さん。俺も腕時計を見たが、多分間に合わないだろう…。

あいつの寝坊は筋金入りだから…。昔から変わらない事だ。

「だけどうらやましいな…幼なじみって」

「そうかな…あいつはうるさいだけだよ。名前が合っていない」

「確かに静香って言うけど…静かじゃないけどね」

「そっだよ」

そう言っただけ俺達は笑い合っていた。凄く自然でいい雰囲気だ…今なら告白出来そうだし…ってそう言えば！

俺、沙紀さんの下駄箱にラブレターを入れたんだ。今頃になって緊張してきた。

「どうしたの？…俊哉君」

「えっ…いや、なんでもない」

「そお？…ならいいけど…」

俺と話しながら日直の仕事をこなしていく沙紀さん。俺はラブレター…の事が気になり、ソワソワしていた。

沙紀さんの姿を確認しながら俺は考えていた。沙紀さんは何も言わない…まだ見てないか？

ラブレターの存在がどうなったのか…沙紀さんの思いはどうなのか…今すぐにでも聞きたい衝動を押さえていた。

今ここで聞いて駄目だったら怖い。なら…もう少しこの時間を大切にしたい。

この二人っきりの時間を堪能したい！楽しい時間をもっと少し長く味わいたい…って思う俺ってかなりの臆病者？

等と考えていたら、いつの間にやらクラスメイト達で周りがガヤガヤとしていた。

時間も後少しでH Rの始まる。都合よくチャイムが鳴り、これまた都合よく先生が入ってくる。

「おーらあ…席に着けえ」

やる気の無い先生の声で始まるH R。出席を取り始め…次々と名前を呼ばれていく。

俺が呼ばれ、沙紀さんが呼ばれて…そろそろあいつの番だと思っていた、その時…

「間に合ったあ！…はあはあ…」

静寂を打ち破る音と共に、現れたのは遅刻常習犯の静香。短く切った髪が汗で額に張り付いている。

荒い息を吐きながら、教室内を見渡している。しかし、静まりかえった教室に先生の無情な一言が…

「…遅刻」

「嘘っ！…セーフでしょ！」

「ギリギリアウトだ」

「そんなあ」

その場に力なくヘナヘナと座り込む静香。何とも哀れな感じだ。

「早く席につけ…」

「はあ…い…」

先生に言われてガクッと、肩を落として歩いてくる静香。足取りが重たいようだ。

「よう…また遅刻か」

「そつなのよ…って、なんで俊哉がいるの！…あっ…今日起こしに来てくれなかったでしょ！」

「うるさいぞ…静かにしろ」

終いには怒られる静香。舌を出し可愛くおどけて席に着く…って俺の後ろだけど…。

そんな感じで始まる授業…しかし、後ろでは何やらうるさい静香。

本当に落ち着きの無い奴だ。

昔から無意味に元気で、よく俺は泣かされてたっけ…。猪突猛進爆裂娘…一言で言えば、バカ。詳しく言えば…馬鹿。

それだから、今でもこいつだけは苦手だ…色んな意味で…。

そうこうしている内に昼休み。俺は昼飯を…

「一緒に食べようよ！俊哉」

食べに行こうとして捕まった。ガツチリと捕獲されたとも言っが…。

「俺は、飯がないだが…」

「それなら大丈夫 朝、コンビニで買ってきたから」

「遅刻した奴が言う事じゃないぞ…静香」

「いいから、気にしない！ほらっ」

そう言って手渡されたのは…パン。しかもクリームパンとジャムパン…そして、アンパン。

俺に病気にでもなれと言うのか…この組み合わせは。トドメは極甘いちご牛乳…もう何も言えない。

しかし…それと同じものを目の前で、平然と食べている静香。

「ん〜！やっぱり、ジャムパンはおいしいね」

「よかったな…」

「うん！」

力なく返事をした俺に、満面の笑みで返す静香。俺とは、正反対だ

…どうして好みまで反対なんだろうか…。

静香は甘党…俺は辛党。こつも合わないとは、珍しい事だ。

「ふぉふぁるへ…ふぉふぁふぁ…」

「食べてから喋れよ…まったく、少しは落ち着いたらどうだ」

「……………うぐつ…ぷはぁ！ところで俊哉…」

「まったく聞いちやぁない…なんだ？」

「さっきの休み時間、沙紀から手紙もらった」

「……………はぁ？」

俺は何とも間抜けな返事を返してしまった。静香が言った意味が分からない…誰が何をくれたって？

そんな俺を他所に、鞆から何かを出してくる静香。それはとても見覚えのあるもの…。

「これ…ラブレターだよね」

「そうだろうな…不幸の手紙には見えない」

「だよね…どうしようかな」

「何が…」

何かを悩んでいる静香。俺はそれ以上に困惑して悩んでいた。なんで静香が俺の書いたラブレター持つてるんだ！

それに、沙紀さんが静香に渡したってどういう事だ…。訳が分からなくなつて頭を抱えてしまった。

「困つたなぁ…」

「何がだよ…」

お前以上に、俺の方が困っているとは口が裂けても言えない。

「私…好きな人いるし…」

「……………はぁ？」

今度は驚いた。今…何言つた？こいつに好きな人がいるだと…それは初耳だ。

「でも…行かないと失礼だよね」

「…それとこれと…何の関係があるんだ？」

「えっ？…だって、このラブレター…私宛に来たものだもん」

「……………はいつ？」

「だ・か・ら…これは私に來たラブレターなの！『朝、下駄箱に間違えて入ってたの』って沙紀がくれたの」

「っ！…ちよつと見せろ！」

「あつ…俊哉」

俺は静香の手からラブレターをもぎ取り、確認した。確かに俺の字だ…間違いない。

だけど、これは沙紀さん宛てに書いたもので…

「ああー！ー！ー！」

「ど、どどど、どうしたの？俊哉」

驚いている静香を無視して俺は震えていた。なんてこつた…俺、やってはいけない事をやってしまった。

ラブレターを書くのは、初めてで緊張していた俺は、慣れる為に色々書いてみた。

その時に、名前がないと真実味がないので…静香の名前を書いたんだ。こいつの名前なら恥かしくないし…と思つて。

それを間違えて送ってしまったんだ！だから、中を見た沙紀さんは静香に渡したんだ。

俺の大馬鹿野郎！…せめてもの救いは、俺の名前を書いていない事だろう。

「どうしたの？ねえ…俊哉」

「えっ…いや…別になんでもない」

なるべく平静をとりつつ、俺は考えていた。どうする？…こいつからこれを奪うか…それともここで本当の事を話すか…。

どっちしろ、俺が血を見るのは明らかだ…こいつには勝てないから…昔から、一度も喧嘩で勝てた試しがない。

「よしっ…決めた！私、行つて来る」

「…はあ？」

「だから、このラブレターくれた人に会ってくる。そして断つてく
る…好きな人がいるって」

「いや…それは…あのなあ…」

「と…言う訳で、俊哉…着いて来て」

「はあ…何でだ？」

俺を指差しながら言う静香に、間抜けな顔で返事を返した。ラブレ
ターを書いたのは俺だ。

なんで、ラブレター書いた張本人が、着いて行かなきゃならないだ。

「私がもし、襲われたらどうするの！」

「俺は、相手に同情する…」

「何ですって！いいから着いてくるの！分かった？これは命令…絶
対服従のね」

「はあ…おかしいだろ。絶対に何かおかしいだろ…」

目の前で鼻息荒く、俺を見据えている静香。やっぱり…俺はこいつ
が苦手だ。

頭が痛い…。俺は痛む頭を押さえて残りのパンを食べていた。味な
んか分かったもんじゃない…。

「遅い！」

「…落ち着けよ」

俺達は、ラブレターに書かれた場所にやってきていた。俺が書いた

んだけど…。

屋上には誰もいない…俺達二人以外は…

「いつまで待たせるのよ！まったく…」

「……はあ…」

いつまで待っても来ませんよ…とは口が裂けても言えません。現に書いた張本人は横にいるのだから…。

かなり、ご立腹の様子 of 静香。顔が物凄く怖い…今更、本当の事言えない。そんな雰囲気じゃないし…。

「きい！出て来い畜生お！」

「おいっ…落ち着けて…」

「うきっ！！」

「お前は猿か…」

暴れ出した静香を何とか押さえつけて、思案している俺。どうしようか…このまま待っているのも何だし…

「帰るか？」

「いやっ！」

即答で返された。こうなれば、絶対に引かないのが静香の性格。この際、俺が犠牲になるか…。

「ああ、もう！…」

「あのな…静香」

「何…？俊哉」

「あのラブレター…俺が書いたんだ」

「……えっ？」

物凄く間抜けな顔をしている静香。しょうがない…本当の事を話して一発殴られよう。

「実はな…あれは…」

「本当に俊哉が書いたの？」

「あのなあ…よく見てみる。俺の字だろうが…」

「……あっ…本当だ。俊哉の字だ」

ラブレターを読みながらがフムフムと頷いている静香。

「それでだな…その手紙は…」

「うれ…しい…」

「…はあ？」

「嬉しい…俊哉、私の事好きだったの？」

震える声で返事をして、手紙から顔を上げた静香の顔。それは今まで見た事のない顔をしていた。

女の子…それも恋する女の子の顔と、でも言えいいのか…頬を染めて瞳には薄っすらと涙を溜めていた。

「いや…だから、それは…」

「私も…俊哉の事好きだよ」

静香が俺を見詰めている。その瞳は真剣で…でも、それでいて優しく揺れていた。

好き…俺が今まで言いたくても言えなかった言葉。それを静香は躊躇う事なく言っている。

「……じゃあ…お前が好きなの…俺？」

無言で頷く静香。一粒…雫となり落ちる涙が綺麗に輝いていた。

「ずっと…ずっと好きだったの」

「えっと…あの…」

そうして、俺を見詰める瞳に俺は…言葉を失っていた。それは何とも言えない…一種の魔法みたいなもの…。

俺は、沙紀さんが好きだ。だけど、静香にここまで言わせておいて、今更、「違うんだ。嘘でした」とは、

とてもじゃないが言えない。殺される…どうしたらいいんだよ。このままじゃ…俺、静香と付き合う事になるのか？

「俊哉…大好き」

その一言は最早…最終通告だった。俺は、断る勇気も持っていない

みたいだ。

ただ…その場の雰囲気の流れされて頷いていた。俺って、本当に駄目な奴だ。

静香が微笑む…それを見て俺も笑う。顔が引き攣っているのは…ご愛嬌だ。

* * * * *

「早く帰ろうよ！俊哉」

「分かったって…」

教室の扉の前…俺を急かす静香はどこか楽しそうだ。ただ、一緒に帰るだけ…それは今までも同じ。

理由を聞いたら静香に『私達の関係が変わったからよ』と恥ずかしそうに言われたしまった。

俺はこうなった事に、何とも言えない感情をこめて…ため息をついた。

「俊哉…」

そんな俺の心情を知らずに、微笑む静香は夕日に照らされて、とても幻想的で綺麗に見えた。

いつまでこの関係は続くのか…続けられるのか。俺たちはこれからどうなるのか…それは分からない。

でも…楽しそうな静香を見ていると…何も言えない。俺の気持ちも

知らないで…。

「さて…帰るか…」

俺は苦笑しながら、静香のそばに歩いていった…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5182a/>

ラブレター零・ZA・音編

2010年10月26日02時59分発行